

日常生活史 — L氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」(その十二)

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第91・97・98・99・101・103・105・107・108・113・114輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第91輯を参照されたい。

今回利用した、当該資料は、1980年1月15日の15時から20時05分までL氏の自宅で行われたインタビュー内容を、A4タイプ用紙69ページに書き起こしたものである。L氏の略歴は以下の通り。

1890年3月1日	ブラウンシュヴァイクで誕生
1902年～1907年	工作機械旋盤工
1907年～1910年	機械修理工
1918/19年	旋盤工
1919年～1927年	組立工
1927年～1933年	電力会社のメーター読取人
1905年～1927年	ドイツ金属労働者連盟組合員
1927年～1933年	一般自由職員連盟 1928年以降
1928年以降	SPDドイツ社民党员, 演劇協会>>エルヴィラ <i>Elvira</i> <<会員, バイオ化学協会員, 消費者協会員

役職：労働者評議委員

結婚：1914年に針子と結婚

父：1841年にライフェルデ *Leiferde* で誕生，1917年にブラウンシュヴァイクで死亡。職業は1867年からグリンメ・ナターリス&Co. 社 *Grimme, Natalis & Co.* で機械組立て工のマイスターとして従事。未組織

母：1864年にホルツミンデン *Holzminden* で誕生，1921年にブラウンシュヴァイクで死亡。結婚後は主婦。未組織。出産5回

1. 両親について

私たちは、よく両親と遠足に行って、薬草を集めたものです。どんな天気の時にも、頻繁にそういう遠足に行きました。両親の家を出てからも、妻とよくそんな遠足に出かけたものです。遠足に出たら、必ず何か持って帰ってきました。後には、自転車に乗って出かけました。

同じ家に家庭農園を持っている家族が住んでいて、同じ家の住人たちのほとんどが、土曜日の昼にはその農園に行きました。そして日曜日の朝も、農園の手入れをするために行くのです。本当は、手入れをすることが、家庭農園に行く目的でもあったのです。

1919年には、もう5つの大きな家庭農園の集落がありました。最初の家庭農園はラウトハイマー通り *Rautheimer Weg* にありました。家庭農園です。ある少佐がその土地を寄付して、そこに家庭農園を作ることを望んだのです。そういう少佐でした。彼はシュレーバー *Schreber* という名前だったと思います。だから、この農園のことをシュレーバー農園と呼んだのです。農園ではいつも何かしなければならないことがありました。農園のために肥料も手に入れなければならなかったし。そのうちに、ウサギを農園で飼いました。ウサギの飼育をしたのです。それで毎日、餌を探さなければなりませんでした。

2. 両親の家の住居

最初の記憶があるのは、ホップフェンガルテン *Hopfgarten* の家で、この家は農家の主人の持ちものでした。その後、そこにさらに2軒の家が建って、缶詰工場も建ちました。通りといえば、その他にはボックアッシェン通り *Bockaschenweg* だけでした。その反対側には孤児院の大きな農園がありました。この農園は、ものすごく大きく、孤児院は、ぜんぜん貧しくなかったのですよ。ただ、孤児院の院長が本当に残念なことに悪い院長だったのです。まったくひどい院長だったのです。ホップフェンガルテンの家々は、どの家も木組みの家でした。ほとんどの家が2階建てで、上に破風の屋根がのっていました。ほとんどは農家でした。労働者の居住区ではありませんでした。

私たちは、いつも言ったものです。「金持ちたちの家には子供がいない。彼らの子供は1人か2人だけれど、労働者は6人、7人、8人、9人、10人の子供を連れて歩いている」とね。そして、住居を構えようとする、4週間はそこに住むことができるが、またそこから追い出されるのです。私の両親の家には建設会社の者が来て……という時期がありました。つまり、私たちの家に、2～3の建設会社が来て、「Lさん、あなたのために素晴らしい住居があります。1年間は家賃を払わなくてもよろしいです。ただ、実際に住むという条件があります」と言いました。最初はコメニウス通り *Comeniusstraße* です。このコメニウス通りの住居は建てられたばかりでした。1897年から98年にかけてコメニウス通りができて、そこにたくさんの家も建てられたのです。その当時、4部屋で、98平米から108平米の住居でした。コメニウス通りの学校の隣の家で、すばらしい住居でした。しかし、売られてしまいました。各階に3つの住居があって、どの住居も110平米位の広さでした。家々は競売にかけられてしまいました。誰も越してこなかったのです。下から、窓という窓に「貸します」の張り紙でいっぱいでした。私たちのパパは、「いやー、私はこの住居でとても快適に暮らしているが、この住居に家賃を出して住む？ そんなことを私の妻には言えないよ」と言って、

ウーデ *Uhde* の処へ行つたのを覚えています。ウーデはコメニウス通りに5～6軒の家を持っていたのです。ウーデというのは、建設業者で、後にマリーエン通り *Marienstraße* に住みました。後に、コメニウス通りの先の、マリーエン通りにも3軒の家を持ったのです。そこには警察署長のブセニウス *BuBenius* が住んでいました。彼は素晴らしいシェパード犬をもっていて、大きな庭の中に建つ木組みの家に住んでいました。その家をウーデが買ったというわけです。つまり、ウーデは、後にマリーエン通りの家々を建てて、そこに住んだのです。その向かい側の庭を突切った所は、当時はまだ歩道でしたが、後にカスターニエン通り *Kastanienallee* になりました。

ウーデは、いつも私たちの家にうるさくやって来ました。私の両親は、まだ引っ越していなくて、私たちは当時、家計が苦しくなっていました。この大家の娘が結婚したのですが、この娘も私たちと同じ家の中に住居を求めたのです。彼女は軍隊の男と結婚しました。軍曹です。それで、パパは言ったのです。「私たちはロイプケ *Reupke* のところの住居に住めるだろう。彼が住居を提供してくれるというのでね」と言いました。

それで、私たちはローズ通り *Rosenstraße* 4番のロイプケの所に移りました。その住居では、上の階にもう一部屋あって、男の子たちは、ここに住みました。トイレは中庭にあったけれど、このロイプケの所の住居は、すてきでした。この家はとても良く建てられていて、堅牢でした。そしてその後、新しくトイレも造ったのです。パパは、進歩的な考えをもっている人でした。

3. 労働者居住地域の様子

ローズ通りには、労働者ばかり住んでいました。労働者だけです。家々は、最初は、すべて借金によって建てられたものでした、銀行からの借金です。そうして、大家とはいえ、本当は名前だけで、皆が言っていたものです。「ここにある煉瓦の1個さえも大家のものじゃあないよ」とね。私の家の大家は、グリーンメ・ナタリス社の機械工でした。彼は銀行から金を借りて、家を買っ

たのです。私の家の最初の大家は左官のマイスターでしたが、彼は金の計算違いをしたせいで、頭が狂ってしまい、ケーニッヒスルッター *Königslutter* に連れていかれました。それで、その家が競売にかけられたというわけです。6家族用の住居のある、しっかりした家でした。とてもすばらしい住居でしたが、4,300 マルクで売られてしまったのです。

カール通り *Karlstraße* の一部は、協同組合の家で、どれももう4階建ての、堅牢な家でした。39番の家から始まって、39/40。39 a, b, c, d, e, そして40 a, b, c, d, e, f までのすべてが協同組合の家でした。住民はすべて労働者でした。労働者の他に市庁舎で働いている人も少しいました。それから行商をしている人も住んでいました。彼は小さな回転木馬を持っていましたが、通りにいろいろなスタンドも出したりしました。ネクタイやネクタイピン、ズボン吊りなどのスタンドも出していました。カール通りで働いている人々も、カール通りに住んでいました。つまり、缶詰工場で働いている人などが、たくさん住んでいたのです。缶詰工場は2つありました。その内の1つは、今もあります。

工場の中で働く人もいましたが、ほとんどの人は、時期になると、缶詰工場からカール通りの家に野菜を持ってきました。そこでエンドウ豆をサヤから出したり、人参の皮をむいたり、アスパラガスの皮をむいたりしたのです。そういった野菜はみんな家に運んで作業をしたのです。工場だけでなく、家でも作業をしたのです。そして野菜は工場に届けられるのです。工場では、渡された後に検査されます。しかし、ミスが見つかったら、仕事はもう来なくなります。

その仕事をするのは、女の人たちで、家族全員が手伝いました。みんながです。女の人たちは小さな手押し車や背負い籠を工場に持って行き、野菜を受け取って来るのです。そして例えば、さやいんげんの筋を取る仕事だと、3袋か4袋を同時に運ぶのです。それからすぐに家の住人みんなが中庭に坐ってインゲンの筋取りをしました。

労働者の居住地域の中でもヴェルダー *Werder* の住居は悲惨でした。誰か

そこの住人を知らなかったら、暗くなってからはそこへ行かない方が良いと言われていた場所です。労働者であってもダメです。殴られますよ。労働組合会館があるけれど、それは別です。それにクリント地域 *Klint* です。評判はとても悪かったのです。クリントには、今日では素晴らしい住居があります。クリントには、今は学校もあります。しかし、昔は、クリントは、クリントは本当に評判が悪かったのです。「マウアー通り *Mauerstraße*, クリント, ヴェルグーでは、誰もが警戒しなければいけない」と言われていました。労働者自身でさえも、クリントへ行ってはいけないなどと言っていたのですから。このような地域には、一部、悪い下種どもが住んでいました。ランゲ通り *Langestraße* もですよ。ヴェーバー通り *Weberstraße* もそうでした。ニッケルンクルク *Nickelnkulk* もです。ニッケルンクルクにはある同僚が住んでいました。彼は旋盤工でした。私たちはこう言い合ったものです。「カール *Karl!* 何てこった、お前がニッケルンクルクに住んでるなんて!」「いや、俺はヨードゥテン通り *Jodutenstraße* に住んでいるのさ!」と彼は言ったものです。彼はニッケルンクルクとヨードゥテン通りの交わる角に住んでいて、生粋のブラウンシュヴァイク人でした。標準語のドイツ語はほとんど話せませんでした。

私は、その他の労働者の居住地域もたくさん知っています。叔父のローベルト *Robert* がランゲ通りに住んでいました。ランゲ通りには共産主義者たちが住んでいました。それに最初のナチ党員が住んでいたのもランゲ通りでした。

社民党員は、会社員や技能工や熟練工などの労働者が多く、彼らはカール通りに多く住んでいました。カール通りの他に、当時としては新しくできた通りだった——しかし、今ではもう40年から50年たっているような通りですが——ハーゲンリンク *Hagenring* やヴィーゼン通り *Wiesenstraße*, それにリヒター通り *Richterstraße* などに社民党員が住んでいました。

クロイツ通り *Kreuzstraße* もまさしく労働者の居住地域でした。クロイツ通りは、労働者の居住地域の中でも、とても悪い地域でした。今ではラフ池

Raffteich まで通り抜くことができますが、当時は、クロイツ通りに行こうと思ったら、クロイツ通りの住人に顔を知られていなければ、誰も無事に通り抜けられなかったものです。メーターの検針員なども「ああ、なんてこった、とっとと出て行け！」と罵られたものです。

ヴァーベ通り *Wabestraße* や、リヒター通り *Richterstraße*、それにシャルン通り *Scharmstraße*、ラーベ通り *Raabestraße*、ゲーテ通り *Goethestraße* などは、当時すでに比較的良好の方の、労働者の居住地域でした。これらの地域にはブラウンシュヴァイク住宅組合の家がたくさんあったからです。ブラウンシュヴァイク住宅組合の家々に住んでいたのは、ほとんどすべてが技能工でした。今日では、それがどちらかというと、大学の教授たちです。ノイエ・クノッヘンハウアー通り *Neue Knochenhauerstraße* は、それほど評判が悪かったというわけではありません。しかし、住居がとても良かったというわけでもありません。一部は木組みの家で、もう古かったのです。床がもう傾いていて、ベッドの下に木材を置かなければ、ベッドがまっすぐに立たないような状態の家が多かったのです。

ブラウンシュヴァイクには、家の背後に中庭のある家が多かったのです。通りに建つ家の背後に中庭があり、その中庭に次の家がつながっていました。ランゲ通りには、後ろに中庭のある家がたくさんありました。ベッケンヴェルカー通り *Beckenwerkerstraße* にも、そんな家がたくさんあったし、ヴェーバー通りにもたくさんありました。家の後ろの中庭を突っ切って通って行かなければならない家がたくさんありました。私たちの家のそばにもホップ島があって、この島をずっと突っ切って行かなければならない家もありました。ホップフェンガルテンの家ですよ。缶詰工場の会社が、後ろ側に家を建てたのです。レオンハルト通り *Leonhardstraße* にも中庭の後ろに家を建てて、消費協会が事務所を開きました。公務員消費協会です。その事務所も中庭のずっと後ろ側の家の中にもありました。つまり、後ろ側に消費協会の売店があったのです。

グリーンメ・ナターリス社の労働者は、大部分はヴォルフエンビュッテル

Wolfenbüttel に住んでいました。他には、ローズ通りやカスターニエン通り、ホップフェンガルテンやグリーン通り *Grünstraße* などに住んでいたのです。そこら辺には会社の労働者がたくさん住んでいました。

町の外側のウェスト通り *Weststraße* などはたちの悪い地域でした。この地域は、オットー・ベンネマン *Otto Bennemann* が生まれた処なのですが、彼自身が「我々の処は本当に困ったものだ。誰も中に入って来ることができないのだ」とよく言っていたものです。青少年だけでなく、大人もです。強盗などではないけれど、彼らは何でも壊してしまって、自分たちだけで固まっていたかったのです。誰も中には入って行けませんでした。

私の妻の両親が、ヒルデスハイマー通り *Hildesheimer Straße* に住んでいました。私たちは、そこに一年半住んだ後に、さらにそこからハンブルガー通り *Hamburger Straße* へ引っ越しました。私は家具をすべて自分で運びました。たったひとりで、住居のすべての物、竈やタンスなどすべてを運んだのです。義父はビール工場から馬車を調達してきました。私はハンブルガー通りで馬車から荷物を降ろしました。義父は馬の世話をしなければならないので、私は一人で階段を3階までのぼって、すべてのガラクタを上に乗ったのです。すべてです。そうすると、彼は馬車でまた何処かへ行き、ビールを1箱持って来て、「まあビールを1本飲もうよ！」と言うので、私は「僕はビールを飲めないよ。飲んだら、馬車に乗れないから」と言いました。そうすると、「いったい何処に引っ越し荷物があるんだい？」と義父が言うので、「僕がみな上に運んだよ」と答えましたよ。

さて、私たちはハンブルガー通りに落ち着いて、農道沿いに散歩しました。私と妻とで散歩したのですが、道路を下っていくと、上の方の住人が私たちを野卑な言葉でからかいました。私たちはそれぞれ自転車を持っていたのですが、彼女は私に「戻りましょう」と言うので、私も「そうだね、戻ろう」と言って、家の中に入りました。その後、ある晩に散歩に出た時、私たちは自転車なしでした。そうしたら、一人の男が自転車で通りすがりに私を押し去ったのです。それで私たちはアスパラガスに、アスパラガスの畝に飛ば

されました。そこで、彼の空気ポンプが車輪から落ちて、彼がばたっと倒れて、落ちてきたのです。私は彼のポンプを拾って、彼の背中を何度か叩いてやりました。そうしたら、5～6人が目の前に立ちました。彼女は「私はもう今日はここから先の方へは行かないわ」と言いましたよ。それはハンブルガー通りでのことでした。ハンブルガー・ホーフ *Hamburger Hof* の背後の農道で起きたことです。今ではあの建物もみんな取り壊されました。すべてなくなってしまいました。

当時、学校の中にいくつかの乱暴者のグループがありました。有名だったのは、カスターニエン通りのシュノール *Schnoor* 兄弟でした。シュノール兄弟は9人兄弟姉妹で、タバコ1箱、あるいはビール1瓶のために、誰かを背骨を麻痺させるほどに殴りつけたのです。そんなある時にボクサーのオットヒェン・マイアー *Ottchen Meyer* などが入り乱れて、彼らと殴り合いが始まって、「助けてくれ！ 助けてくれ！」という声が聞こえました。その後は掃除夫が来て、そこら辺に散らかったものを片付けました。その他には誰も来ませんでした。

昔は、ローズ通りは朝の国と言われたものです。街中でも普通に、「ああ、お前は朝の国 *Morgenland* に住んでいるのか？」などと言われたのです。シュタイントア *Steintor* は朝の国に属していました。「朝の国」という言葉は、良くない意味で使われました。つまり、そこで女の子と知り合いになったとすると、その住人にいくらかの金をせびり取られるのです。でなければ、その地域に入ることができないのです。あるいは、そこに住む女の子と町に出かけようとしても、夜の国 *Abendland* である外へ出ることができないのです。そんなことは、ここブラウンシュヴァイクではよく知られていることです。

私の同僚たちの多くが、他の党の党员証を持って、働いていました。私たちを煽動して追い回していましたからね。「おい、ナチがくるぞ！」というわけでもうすでにナチ党员がいたのです。ナチはすでにレーンドルフ *Lehndorf* に建設用地を持っていました。レーンドルフ全体が、当時すでにナチに

よって開発されていたのです。電力会社では、警官を父親に持つ同僚が一人いました、その父親と私は、お前、俺と呼び合う仲でしたが、彼はナチの権力掌握のずっと前に、私に、こう教えてくれたのです。「エーリッヒよ、うちの息子は、いずれにしても電気会社に就職するが、バイエルンで大きな団体ができて、息子はそこへもう何度も行っているってことを知っておけよ」とね。

4. 学校生活

私は、古い兵舎の脇にあった学校と、ハインリッヒ通り *Heinrichstraße* の学校に通いました。この学校では先生たちに何度もお仕置きをされました。私たちを殴ることしか知らないような先生がいたのです。ひどいものでした。しかも、女の子まで殴る先生もいました。

上級クラスにインミッシュ *Immisch* という名前の先生がいたのですが、彼は学校に来ると、ハンカチを取り出して、メガネも取り出して拭くのです。そしてメガネがびかびかになると、自分の机から棒を取り出し、ベンチに飛び乗って、生徒を順々に棒で叩いてゆくのです。理由もなしに毎日です。上級クラスには23人の生徒がいて、私たちは13歳でした。彼は狂人のように私たちを殴ったものです。その教室のベンチというのは、折りたたみ式になっていて、ちょうつがいをボルトで締めているものでした。私たちは、ある時、そのボルトを外しました。そしてみんな詰めて坐り、取り外した板は膝の上に乗せておきました。そこで、彼がそのベンチに飛び乗ると、脚がバラバラに開いて、あっという間に下に落ちました。腕が折れました。腕を折ったのです。誰も同情しませんでした。隣のクラスの先生が教室にやって来ました。彼は、インミッシュが床の上に横たわっているのを見ました。そこで彼の処に行き、助け起こしました。そして何も言いませんでした。翌日の朝のことです。ラムケ *Ramke* という名前の校長の授業がありました。この校長は教室に来て、「おはよう」「おはよう」と言いました。そしてどの生徒にも「い

いや、ミュラー *Müller*？ いいや、名字じゃなくて、君たちの名前の方を知りたいのだよ。何、名前と呼ばれたことがないって？ 私は、君たちのことは名前と呼ぶよ」と言うのです。その頃、私たちはゴムバンドで紙を丸めた物をいつも黒板に向けてかちんと音を立てて打っていました。彼は「じゃあ、これからは私が教室に入ってきたらすぐに、遊ぶのか、それとも授業をするのか決めよう。遊ぶなら、校庭へ行こう。授業するなら教室の中のだ。」と言いました。この校長は、こんな口調でした。しかしまあ、あのインミッシュという名前の先生は怖れられていました。

あいつは狂人のようになって殴るんだとみなが言っていたものです。しかし、まず彼は大の自然愛好者で、私たちとヌスベルク *Nußberg* やクヴェルマー・ホルツ *Querumer Holz* へ行くと、葉っぱを摘んだりして、ラムケ氏に聞いてみよう、校長の処へ行行って、葉っぱを見せながら、「ラムケ先生、この葉は何でしょう？」と聞きます。そうすると、校長は「それは何々科のグループに属していて、種類はこうこうで、特徴はこうこうで、どんな風に花が咲くか」などを説明してくれたものです。そして、次に誰かが校長の処に行行って「ラムケ先生……」と話しかけて、しかも同じ葉っぱを持って行っても、まったく同じように説明しました。後年、私たちの学校時代を通じて、「彼よりも良い先生はいなかったなあ」と同級生たちと話していたものです。宿題なども、「もうそれでいいのさ。僕たちの先生は、いいって言うさ」などと言っていたくらいで、「君たちは一体、何をしてたんだい？」とか「何でそうなったんだい？」などということは、彼は一度として言ったことはありませんでした。

ハインリッヒ通りの学校には他にも変わった先生がいて、博物学のシュタンシュ *Stansch* 先生は、水槽を持っていました。2m もあるものでした。私たちはいつも池に行行って。魚の餌をとってきたものです。しかし、その後、この先生はアメリカに移住してしまいました。彼には何かを学びましたとも。他にも、社民主義者の先生もいましたが、あの自然主義者が社民主義者だったのです。それから、彼もだったのですよ……あのラムケ先生ですよ。私た

ちが1年生の時に、フリッケ *Fricke* という先生がいました。彼も社民主義者でした。

5. 子供時代の労働と遊び

〈家事手伝い〉

家事の手伝いはいつもしていました。規則的にしていましたとも。どの子どもです。ある週にナイフとフォークを磨くと、次の週は長靴を磨きました。皿洗いもしましたし、そういったすべての家事手伝いは、決められた仕事としてやっていました。そうすることによって、家の中が清潔に保たれたのです。

家事すべてを手伝ったのです。どの子ども毎週、手伝わなければならなかったのです。当時、ナイフとフォークは、脚の付いた1枚の板の上で磨いたものです。皮がその上に張られていて、その上に細かい砂をまき、その上でナイフとフォークを磨いたのです。その後には乾いた布巾で拭きます。何度もフォークの歯と歯の間の砂を布巾できれいにぬぐい取るのです。毎週、これをやりました。私たちは、小さい時に家事の手伝いを始めました。つまり、6歳の時には「私の靴を磨きなさい」と言われたりして、手伝いをし始めたのです。そういった決まった家事手伝いの他にも、ローズ通りの家に住んでいた頃は、なんでもやりましたとも。管理人がベルトを買ってきて、私が屋根の修理もしました。彼が私のベルトをしっかりとロープに固定して、私は屋根の上に修理に上ったのです。屋根の窓枠を塗って、屋根の樋をきれいに掃除しました。私は何でもしたのです。彼の3人の息子たちは何もできなかったもので、私がやったのです。私の家の家事は、主に母がしていました。

〈子供の労働〉

私は、学校に行くようになってからは牛乳配達をしていました。だから、遊ぶ時間はもうそんなにありませんでした。堅信礼貯蓄会というのがあって、

月曜日に学校へ行くと、「エーリッヒ、いくらかお金をもっているか？」と聞かれるので、私は「1マルク持っているよ」と答えたものです。私は毎回、月曜日に1マルク払いました。このお金はミルク売りの収入から出たものです。ミルク売りの収入は、家には入れず、私の小遣いになりました。この小遣いから堅信礼貯蓄会に払い込んだのです。ミルク売りの収入は、いつも堅信礼貯蓄会に入れました。それで、学校を卒業した時には、貯金が214マルクになっていました。それは、当時としては大金でした。だから、私の両親は堅信礼の支度のために、何の出費もせずすみしました。私は、靴、靴下、下着、背広やコートなどのすべてをこの貯金で買ったのです。すべてです。母が「アウグスト *August*（：父親の名前）、さあ、男の子の堅信礼に必要な物を買に行きましょう。この子はいつも働いていたのだから、必要な物を買いきましょう」と言ってね。それで、私は好みの物を探して、欲しい物をすべて手に入れました。靴下、編み上げ靴など、すべて手に入れました。コートや堅信礼用の物すべてです。両親の財布からは、私の堅信礼用に1ペニヒたりともお金は出ませんでした。

それに、私は毎週、籠にいっぱい卵を家に持って帰りました。ただでした。つまり、私はミルクを大きな農家から持ってきていましたが、その農家に行くと、私はいつも……村の人々をおじさん、おばさんと呼んでいたものですが、「おばさん、お母ちゃんが卵をいくつかもらえないかと言ってるよ」と言うと、「坊や、籠を持ってお行き」と言います。そこで私は籠をもらうのですが、その籠の蓋には木でできた穴が付いています。「その穴の中に入るように卵をきれいに並べて壊れないようにするのよ」とまたおばさんが言います。そこで私が「いくら……？」と尋ねると、「そんなことはお前さんに関係ないよ」と言われるのが常でした。

<子供時代の遊び>

少し大きくなってからのことですが、私たちは叱られて、ウンター・デン・リンデン *Unter den Linden*、つまりエーベルト通り *Ebertallee* に行くように

と指図されたことがありました。プリンツェン公園 *Prinzenpark* のある場所です。そうですとも、そこがウンター・デン・リンデンなのです。警官が「ウンター・デン・リンデンに行きなさい。あそこなら、お前たちも窓ガラスを壊さないだろう……」と言ったのです。ローズ通りからだとはそれほど遠くはありませんでした。ローズ通りからすぐの所にマリーエン通り *Marienstraße* がありました。当時は、まだそんなに道路がありませんでした。そこら辺は果樹園だったのです。クライネ・ホルツ *Kleine Holz* と呼んでいた農園は、今、市立公園になっていますが、その前には幅の広い堀がありました。堀の横に果樹園があって、朝の8時から働いていました。この果樹園はロビンソン *Robinson* のものでした。私たちは、いつもロビンソンと呼んでいたのですが、彼には子供が4人いましたが、奥さんはもういませんでした。彼女は事故で亡くなっていたのです。木から落ちて、首を折ったのです。彼は、その後、ヘアツォーギン・エリザベート通り *Herzogin-Elisabeth-Straße* と呼ばれていた通りに越しました。ウンター・リンデの辺りは、こんな風でした。しかし、子供の私たちは、ここへ遊びに行くのは好きではありませんでした。

通りで遊ぶのが一番好きでした。私たちは屑屋から大きな車輪の自転車を買って、これで自転車乗りを練習しました。車輪が本当に大きな自転車で、この自転車は肉屋のマイスターが乗っていたものでした。近所の子の奥さんが、警官の所に行って、「来てみてくださいよ。子供たちがあのぼろ車で窓に倒れてきてしまいますよ。子供たちは、ウンター・デン・リンデンに行って遊べばいいのです」と言ったので、子供たちにとっては大騒ぎになりました。つまり、警官が「ここで自転車に乗ってはいけないよ。あそこの奥さんは窓ガラスが心配なのだ。窓を壊すことになったら、お前たちにとっても良くないだろう。お前たちのぼろ車は取り上げられてしまうぞ。このおんぼろ自転車をいったい、どこで手に入れたんだい？」車輪が大きいので、最初に乗った子は家主のファスターリンク *Fasterling* の家の窓の下棚から自転車に飛び乗って、私たちが押して勢いをつけなければなりません。ペダルまでこんなに（両手を広げたくらい）あったのですから。前が大きな車輪で後

ろの車輪が小さな自転車でした。慣れたら、自分で押して勢いをつけたものです。つまり3歩ほど走ってから、弾みをつけてサドルに跳び乗るのです。そうしてやっと走ることができたのです。いつも弾みをつけなければなりませんでした。

余暇の遊びというと、大抵は球技でした。ある時、私たちはボルヒェントヴェーテ *Bolchentwete* でボール遊びをしていたのですが、ボールが窓ガラスを壊してしまいました。それで私たちは家に帰って、「ママ、5ペニヒいるよ。エルンスト *Ernst* が5ペニヒで、僕も5ペニヒさ。僕たち、窓ガラスを壊してしまったんだ。だからガラス代を払わなくちゃならないのさ。」と言いました。それで、誰がその家に行くか、マッチ棒を引いて決めました。それでみんなで、その家に行った時、啞然としました。そこの家の前には上級教諭が立っていたというわけです。私たちは啞然としました。彼は、「一体、どうしたというんだい？ 中にお入り」と言うのです。そこで私たちは「ああ、彼はここで僕たちを殴るんだらう」と思ったものです。しかし、彼は「何をしようとしているのだい？」と尋ねました。「僕たちが何をしようとしているかという……僕たちはボール遊びをしていて、ガラスを割ってしまいました。」と答えると、「そういうことも起こるさ、それで？」とまた尋ねたので、「だから、ガラス代を払おうと思って」とね。「ふーん、しかし、お前たちはその金をどこから持ってきたんだい？」と言われたので、「ええ、僕たちは……エルンストと僕がママからそれぞれ5ペニヒもらいました。」「ガラスはもう入れたよ。これからは小教練場か大教練場へ行きなさい。」そう言うてから、彼は私たちにお金をくれて「さあ、あのボール屋に行って、買いなさい。だけど、大きな箱一杯のボール分だから、ボールを買って、みんなで分けなさい。これからはあっちで遊んで、もうよその家の窓ガラスを割ったりはしないように。」と言ったのです。私たちは啞然としたものです。そんなことは、経験したことがありませんでした。大教練場は、当時はプリンツェン公園にありました。そうですとも、プリンツェン公園は、まだ大教練場だったので。そこに後にいくらか木が植えられたのです。当時は、まだそこで歩兵部

隊が教練をしていたのです。第92連隊と第17軽騎兵隊ですよ。馬の練習をしていました。私たちはそこへ行って、練習を見ていたものです。

6. 職業

私は（1905年）9月30日に修行を終え、10月1日、すぐにグリーンメ・ナターリス社を辞めました。というのは、マイスターが赤い連盟をやめると私に言ったからです。赤い連盟とは金属労働者連盟のことです。しかし、組合に入っていなければ、私はグリーンメ・ナターリス社を首になっていたことでしょう。私たちのもとにはすでに職場委員がいて、彼が「我々は、いまや15歳の人々を我々の労働組合に入れることができる。君は組合に入っている」と言ってくれたのです。それに彼はマイスターと意見が合いませんでした。

マイスターが私を首にすると脅した時には、私はすぐに警察に行きました。昔は、警官は赤いヘルメットに長いサーベルをさげていたものです。私は年配の警官のもとに行き、彼に「こうこう、こういうわけです」と訴えると、彼は私と一緒に会社に来てくれたのですよ。彼は「若い、君と一緒に会社へ行こう。そのことについてマイスターと話をしよう。そんな脅しをするなんて、彼が悪い」と言ってくれました。つまり、警官が赤を支援してくれたというわけです。警官は私と一緒に会社へ行き、マイスターにそんなことをしてはいけないと言いました。そうすると、マイスターが私のところに来て「お前はもう1年間の修行を終えたから、これからは出来高給で働いていいよ。たくさん金を稼げるぞ」と言いました。彼は変な発音をする人でした。というのは、彼はユング（ぼうず *Junge*) を「シュング、お前は出来高給で働くと、めっとたくさん金を稼けるぞ」と言ったのです。私は見習い修行をして一人前になりましたが、マイスターは、賃金を低く抑えようとする男でしたから、そんなことを言うだろうと予想していました。そこで私はその週のうちに、カスターニエン通りに今もありますが、ブルンスヴィガ *Brunsviga*（：グリーンメ・ナターリス社はこの名称の計算機も生産していた）に行

きました。当時すでに、私たちはこの会社で計算機を作っていたのです。数字を押す数字盤の旋盤をしました。それで、母に「母さん、今週、僕は……12マルク50ペニヒを家に持って帰るよ。そんなにたくさん稼いだよ」と言いました。しかし、金曜日が給料日なのですが、金曜日にはがっかりしてしまっただけです。マイスターが私に賃金台帳を投げつけて、すぐにまた行ってしまったのですが、びっくりしました。賃金袋の中には5マルクしか入っていませんでした。5マルクですよ。そこで私はすぐに彼のところに行き、「マイスター、こんなことは許されませんよ。僕は12マルク……」と言ったら、「お前のゴミを持ってきて見ろ。ただのガラクタの鉄屑だ。お前のガラクタはこのゴミの山の上にある」と言われました。そこで私は、父が働いている上の階の組立部に行きました。父がこの会社で働いていたのです。「父さん、12マルク80ペニヒ稼いだのに、たったの5マルクしか払ってもらえなかったよ」と言うと、父は「私がマイスターと話してこよう」と言いました。私は「彼は、話を聞く耳をもたないよ。ああ、父さん、放っといて」と言いました。私は給与課に行き、残りのお金を要求しました。それから製造部のマイスターのところに行き、「シュトゥルム *Sturm* さん、僕は数字盤を作りました。あなたは僕の作った数字盤に満足ですか？」と言うと、「ぼうず、これはお前が作ったのか？ すばらしい！ とてもすばらしい仕事だね。どれもみな使えるよ」と言ったのですよ。ガラクタの鉄屑なんかになっていなくて、まったくすばらしい出来ばえだったのです。そして彼は「お父さんにこのことを言ったのか？」と言うので、「ええ、父さんはマイスターと話そうと言っていました」と答えると、「ああ、そんな必要はないよ。私が他の人たちと話しておこう」と言ってくれました。

私たちが機械の前に立つときは、1、2、3と掛け声をかけて、木のスリッパを履かなければなりません。それは事故防止のための職業組合の規定でした。木の底だと滑らないのです。旋盤では油を使って作業をするので、滑りやすいし、当時は自然鋼鉄でしたが、これは油で冷却していたのです。私は1、2、3で木のスリッパを履いて、門番のところを素通りして警官の

所へ行ったら、「若いの、私たちは知り合い同士だよ」と。私が、「こうこう、こういうことが起こった」と話すと、「じゃあ、私が一緒に会社に行こう」と言って、彼はすぐに一緒に会社に行ってくれました。さて、マイスターは作業場から出て、職長のところへ行き、「おい、あの黒いのが」——私の髪は黒いのですが、まったく黒い髪のはいつも「あの黒いの」という名前になりました——「あの黒いのが警官と一緒にくるぞ！」警官が会社の中に入って行って、「誰かここに！」と言うと、会計係長が来ました。警官は「よく聞きなさい。あなたも彼のマイスターと同じことをしたようだが、そんなことは許されません。この若者が私に話したところでは、マイスターのシュトゥルムさんが、彼に、すばらしい仕事をしたと言ってくれたそうだが、それならガラクタの屑鉄ではないでしょう。修行1年目の見習い工としてその仕事をしたのです。」と言ってくれたのですよ。それで、会計係長は私にお金を払わなければならなかったのですが、それ以上の嫌がらせはしませんでした。私は、赤い労働組合に入っていたので、彼は「あいつが修行を終えたら、すぐに首にしてやる」と言ったそうです。

そして、1905年の10月になる直前に、私は彼に言ったのです。「マイスター、私は明日、修行を終わります。明日の日付で書類が欲しいのですが。そうしたら、私が路頭に迷うことはないからです」とね。そうすると彼は「ぼうず……」。「いいえ、何も言わないでください。書類をください。それでいいのです。私を説得しようとしても無駄です。まず、ここで絶え間なく殴られたり……。」とね。マイスターが常に鞭や棒で私たちを殴って回っていたので、それだけでもどっちみち嫌気がさしていたのです。昔はそんなものでした。今は幸いなことに、少し変わりましたが、いずれにしても私はその会社を辞めました。しかし、本当に悪い時期でした。そこで私はほぼ1年間、失業していました。その時期は今（：1980年1月）のような状態でした。失業していたのは、1905年10月から翌年8月末まででした。

そこで私はフェーゲザック *Vegesack* で就職したのです。私は南ドイツまで、あちこちを転々としてきました。ライン川沿いから下ってマイン川、モーゼ

ル川、そしてまたライン沿いに回り、ブレーメンまで来て、やっと仕事を見つけたのです。当時、経営者たちには組織があり、この組織にはブラックリストがありました。だから、求職を問い合わせると、書類を提出しなければならないのですが、そうすると書類を見て、私が労働組合に、つまり金属労働者連盟に入っていることを確認し、「もうポストはうまりました」と言うのです。そんな時に、あるブレーメンの新聞に — 私はブレーメンにたどり着いていたのですが — ブレーメンのフェーゲザックに2人の兄弟がいて、一人はドイツ金属労働者連盟の書記長で、もう一人はブレーメンのヴルカン社 *Vulkan* のマイスター長であるという記事が載っていたのです。そこで私は彼に窮状を訴えました。「若いの、私たちは人を探しているのだよ。」そこで私が、「私はブレーメンの労働証明発行所に行って、昨日、私の書類を返してもらいましたが、どこもポストはうまっているということでした」と言うと、「私たちは、すぐにも人手が必要なんだ……一緒においで」と言うのです。私はちょうどヴルカン社、ブレーメンのヴルカン社ですが、あの有名な造船所の向かい側の通りにいたのですよ。彼は私を連れて、所長のところに行き、「この男を見てください。私はちょうど旋盤工を捜しているのですが、彼は私の弟で、修行を終えた、一人前の旋盤工です。しかし、彼はある組織に入っているために、仕事につくことができません。だから、彼をすぐに雇ってください。私はブレーメンの経営者連盟とすぐにでも……」と言ってくれたのです。こうして、1906年8月末に雇われました。それからブレーメンではヴルカン社で5週間働き、5週間後には、つまり10月には辞めました。ひどい労働条件だったからです。そして私の兄が、ブレーメンの羊毛梳毛工場に連れて行ってくれたのです。ここで1907年まで工作機械修理工として働きました。

私が1年半働いた、ブルーメンタル *Blumental* の傍のフェーゲザックのこの羊毛梳毛工場では、毎朝、事務所に入っていくと、番号札を1枚引くのですが、それには3時から3時半と書いてあります。この番号を賃金手帳に書きこまなければなりません。午後の3時に浴室に行くことができます。朝、

出て来ると、機械の前に立つ者は木製のサンダルをもらい、機械を修理する者はレバーをもらいます。それに、浴室へ行くために、一足の靴下、シャツ、作業服上下と石鹼をもらうのです。機械整備工は、青の整備作業服をもらいました。工作台で働く者、つまり万力台で働く者は、上っ張りを着ていました。この作業衣を毎日午後に返すと、毎日午後に洗濯されたのです。これは、ブレーメン羊毛梳毛会社 *Bremer Wollkämmerei* でのことですが、ここではすでに4,000人が働いていました。

私が逮捕されたのは、アムステルダムのジーマンス社で、1910年の9月7日でした。刑事が私をアムステルダムからライン地方にまで引っ張ってきました。1910年の9月の末でした。ライン川で私たちが船から降りると、一人の下士官と二人の男が私たちを待っていました。刑事が、「私の仕事は終わった」と言いました。それで、私は医者に行かねばならなかったのですが、医者は、〈兵役可能である。本来ならば、彼を拘留しなければならない。彼は兵役義務から逃れようとした〉と診断書に書いて渡しました。私は、「ジーマンス社は、この世界的な会社は、私は何歳であるかを、よく知っていました。ジーマンス社が、組立て作業をするためには、軍隊に休暇届けを出さなければならない、と私に教えるべきだったのです。19歳や20歳の少年の私は、無経験で、何でも知っているというわけではありません」と言いました。修行の旅をしながら、そんなことまで知ることはできないのです。まあ、そんなことはもうどうでもいいことです。私は軍隊に行かなければなりませんでした。メッツ *Metz* に行って、私の軍隊時代が始まったわけです。

第一次世界大戦後は、またユーデル社、つまり信号機製作会社のマックス・ユーデル社 *Max Jüdel* に行きました。以前、この会社で働いていたのです。軍隊へ行く前に本当に短い期間でしたが、このユーデル社で旋盤工として働いていたのです。会社からは、最初の間として出征したのです。そして、ランス *Reims* で土砂の下敷きになりました。それは、こんな風でした。つまり、私は18時間もの間、穴の中に横たわっていたのですが、頭の上に何でもかんでも落ちてきました。そうする内に、土砂をどけて私を掘り出してくれ

ました。医者が私を診て、「大丈夫ですよ、Lさん、会社を辞めなさい。この会社には、もうあなたにできる仕事はありませんよ。」と言ったのです。

そこで、私の妻の従兄が来て、「エーリッヒ、お前のために急いで電力会社の誰かを捜すよ。電力会社で働く気はないか？ 所長と話してみようか？」と言うので、「ああ、もしできるなら、僕は仕事ができなくなったし、何か他の仕事をしなければならないのだから。今はまだユーデル社で働いているけど」というわけで、1918年の11月か12月に電力会社 *E-Werk* の採用募集に応募しました。従兄がまた来て、「明日の朝早くに所長の所に行けよ。シュティークハーン氏 *Stieghahn* のところへだ。彼はお前に会うと言っている。」と言うのです。

それで、私は所長の所へ行きました。会社は、もちろん、まず警察に私のことを問い合わせました。当時、会社は、問題のない履歴の人々しか雇わなかったからです。私は所長のところへ行き、彼と交渉し、彼が「まあ、みんなはつきりしましたよ。ところで、あなたは、いつから仕事を始められますか？」と言うので、私は「明日の朝早くから始められますよ。私は、ユーデル社に縛られていないから、明日の朝からもう仕事を始められますよ。今日中に、ユーデル社に行って、辞めると言ってきます」と言うと、彼は「いいとも、いいとも」と言いました。そこで私が「しかし、問題は、いくら稼げるかですか？」と言うと、「いくらくらいと思っていますか？」と彼が言いました。そこで私は「ええ、私はユーデル社では1時間に1マルク稼いでいますが、会社を変えるからには、もっと稼ぎたいですとも。少なくとも1マルク5ペニツヒは欲しいです」と言ったのです。当時は、半ペニツヒに至るまで計算したものです。そうすると、彼も「Lさん、なんてことを」と言うので、「じゃあ、いいですとも。私の応募書類を返してください」と私が言うと、「私は今ここにメモ帳を持っているが、これによると、電力会社では17年も勤めている者が52ペニツヒしか貰っていないのですよ。」とね。しかも、彼は組立工だということでした。それで、私は「いや、いや、そんなことを言うなら、私の書類を返してくださいよ！」と言ったのです。そうすると、「Lさ

ん、じゃあこういうことにしましょう。私たちは、緊急に人が要るのです。だから、あなたは、4週間は試用期間として働かなければなりません、その試用期間中は80ペニヒあげましょう。あなたがこの期間中、私たちの満足のいくように働いたら、その差額を支払います」と彼は提案したので、私は「それでけっこう。やりましょう。しかし、書類に書いてください。」と受けました。契約は、1919年12月30日付けでした。それで、私は1月1日から働き始めました。それからずっと組立工として働きました。私はそこで電気関係の夜学コースに通って、それから組立工としてそこで働いたのです。まず、メーター部でメーターを修理しました。電気消費量をはかるメーターです。ずっとうまくいっていたのですが、そのうちに事故に遭いました。同僚がはしごとと私の上に落ちてきたのです。私は数週間、病院に入院し、同じ仕事ができなくなってしまいました。それで時計部に回されました。しかし、同じ電力会社の時計部です。ここで1933年まで働きました。つまり、ワイマール時代を通してずっと電力会社で働いていたというわけです。1933年に私は重罪犯罪人として首になりました。

この他に失業していた時期は、1905年10月から1906年8月までと11月の5日間です。その当時は、まだ独身で、両親の家に住んでいました。だから、失業中は両親の援助を受けていましたが、もちろん必要に迫られて、射撃大会で日銭稼ぎの仕事をしました。8の字形の軌道を走るジェットコースターを組み立てるという仕事で、とても良い稼ぎになりましたが、もちろん大変な仕事でした。

7. 両親との親子関係

両親の家では政治については、まったく議論などしたことがありませんでした。子供の頃、自分の悩みなどについて両親と話したこともありません。母とケンカをしたことはありますが、父とはほとんど言い争いなどもしたことはありませんでした。父が「静かにしている」と言って、子供の誰かと口

をきかなかったりしたら、それがもっともひどい状態ということでした。母は、頻繁ではありませんでした、私を箒や火かき棒で叩きました。時々でしたが。

パパは、たとえばグリーンメ・ナターリス社で21マルク稼いでいました。私は、ブルーメンタルの傍のフェーゲザックで働いていたときは、家に42マルク持って帰りました。ある時、聖霊降臨祭の時、父が、「坊や、何て背広を着ているんだい？」と言うのです。それで私は「パパ、作らせたんだよ」「お前は自分用に作らせたというのかい？」と言うので、「そうだよ。作らせたんだ」「お前は、いくら稼いでいるんだ？」「いくら、いくらだよ」というやりとりがありました。フェーゲザックの羊毛梳毛工場の賃金手帳は大した稼ぎをもたらしてくれたのですよ。

8. 結婚について

私が結婚したのは一度だけです。私の妻の結婚前の名前は、ヘレーネ・フィッツナー *Helene Fitzner* でした。

妻とは、仮装パーティーで知り合いました。ここのブリュニングス・ホール会館 *Brünnings Saalbau* でした。大きな仮装パーティーでした。体操協会で開催したものです。1908年か1909年でした。私の知人が「僕の彼女と仮面パーティーに行こう。お前も一緒に行かないか？」と言うので、私は「おお、僕は誰も知らないけど、行ってみよう」と言いました。「イエス」と言わざるをえませんでした。というのも、それはすごく大きなパーティだったのです。すでに180枚の入場券が売れていました。本当に大パーティーでした。ブリュニングス・ホール会館全体を使ったパーティーでした。ブリュニングス・ホール会館というのは、とても大きなレストランで、カフェやダンスホールなどもありました。ブリュニングス・ホール会館です。私はさんざん頭をしぼりました。ある者は騎士になることにしました。またある者はジプシーでした。「いいや、僕はそんなのは厭だ。僕はオルガン弾きになるよ。そうだ、オルガ

ン弾きだ」と、シャルン通り *Scharmstraße* の貸衣装屋に行きました。

オルガンはベルトで支えるのですが、それはどうも実用的じゃないので、籐製の、大きな車輪の付いた乳母車を借りて、その中にちょうどまくオルガンを入れました。そして、すてきなカツラも借りました。踵が斜めに減った靴と、穴をあけたり、破ったりしてボロボロにしたズボンをはきました。ルンペンのようなかっこうです。上着をわざわざはさみで切ったりしました。こうして、私はオルガンを持って会場に行きました。私はものすごくたくさんのお金を稼ぎました。いたる所で私はオルガンを弾いたのです。いたる場所でオルガンを弾かなくてはならなかったのです。そして、5ペニヒに10ペニヒに10ペニヒと……いっぱいになりました。まったく芝居のようでした。そして、最後に「踊れよ！ 僕がオルガンを弾くから」と言ったのですが、仲間たちがひとつのテーブルに坐っていて、女の子たちもいました。スマレやわすれな草などの衣装を着けていました。そこで、私は一人の女の子を見つけて、一緒に踊りました。私はダンスが苦手でした。好きではなかったのですが、踊ってみました。そして、彼女が家に送ってほしいと言うので、彼女を家まで送りました。そんな風に彼女との付き合いが始まったのです。彼女は、私にとっては本当に初めての女ともだちで、そして私の妻になりました。

翌年もまた仮装パーティーがありました。この時、私の長姉が美容院を持っていたので、彼女が私の面倒をみてくれて、私は乳母の格好をして行きました。乳母です。上品な扮装にしてくれました。クリステル・カンペ *Christel Campe* が素晴らしいカツラを用意してくれたのです。髪の色もまさに私の髪に合っていました。大きなカツラでした。そして、自転車のタイヤのチューブで二つのおっぱいを作りました。堅くないように、柔らかく、作ったのです。そして、盛装したのです。お下げも編んでつけました。誰かが肩をつかんでも、このカツラの髪には気がつきませんでした。とてもすばらしい出来ばえでした。乳母です！ この私の姉妹たちは、いつも他の誰もできないようなアドヴァイスをしてくれました。その内に、私は会場で何か飲みたくな

りました。姉は、「こういう場合は……折り曲げることのできる仮面をつけなきゃいけないわ。そういうのは使い勝手がよくて、こういう風に折り曲げるのよ。ただ、誰かがすぐ隣に立たないように気をつけなさい。もし、隣の誰かがプーッと息を吹きかけたら、これは上の方に飛んでいってしまうから。誰かがお前の口を見たら、もうそれでおしまいよ」と言っていました。そこで私はテーブルに行きました。みんなは、テーブルの回りに立っていました。フレンツヒェンおばさん *Tante Fränzchen* とユレおばさん *Tante Jule* だけは、坐っていました。そして他の者たちはダンスフロアーに踊りに出て行きました。そこで私は、グラスに半分残っていたビールをさっと飲みました。そこへ彼らが戻ってきて、「誰が俺のビールを飲んだのだ?」「あの娘だよ、ほら、そこにいるあの女の子だよ」「あの娘は、我々のことを知らないよ」「いや、あの娘はもう何度かこちら辺を歩き回っていたよ。しかし、あんな髪色の娘なんて……。」私の妻は、私の仮装姿について何も知りませんでした。だから、彼女も私に気づかず、仮面をとる直前になってはじめて、私だと見破りました。「みんな知ってる? あの娘は彼よ。あの廊下を歩いているのは彼。女の子じゃないわ。あんな腕をした女の子はいないわ」と妻が言ったのです。この仮面パーティーは、カーニバルの時に催されました。カーニバルの時は、いつも大きな仮面パーティーがありました。ホーフイェーガー *Hofjäger* やブリュニングス・ホール会館やウィルヘルムスガルテン *Wilhelmsgarten* などでパーティーがあったのです。体操協会で催したもので、大きなパーティーでした。200以上の仮面でした! 建物すべてを使って、人でいっぱいでした。

私は、6年も兵役についていました。半年も戦争に行っていたら、休暇をとらなければなりません、私の場合は、休暇がとれませんでした。私の替わりをしてくれる者がいなかったからです。

私の長女は、残念なことに、もう亡くなってしまったのですが、彼女は誕生して1年後に亡くなったのです。私は彼女を生きているうちに見ることはできませんでした。私の妻は、なぜ休暇をとって会いに来ないのかと責めました。それで、「じゃあ休暇をとるよ」ということで、中隊に問い合わせたら、

「なんてことを言っているのだ。ダメだ」ということでした。というのも、私は兵器係下士官の助手役をしていて、彼の運転手をしたり、すべて身の回りのことをしていたのです。私は伝令もしました。何でもしたのです。夜中に食事を運んだりもしました。戦争だったからです。弾が飛び交っていると、食事を運ぶことができませんでした。そうなる和我々は、何も食べる必要がなかったというわけです。汚物の中に横たわっている者たちは、何も食べる必要がなかったのですが、たまりかねて、「ヘンリー *Henri*、今晚は食事を取りに行くよ。」と私は兵器係長の下士官に言ったものです。ちなみに私は後に軍曹になりました。すると、彼が「エーリッヒ *Erich*、馬鹿なことをするものじゃない」と言うのです。そこで私は「食事を取りに行くよ」と言って、大きなアルミニウムの鍋をつかみ、私のリュックサックに入っている不要な物を出して、肩防具の中に入れ、それを塹壕に掛けて、郵便葉書に「俺の休暇がすんだら、戻ってくるよ」と書き置きを残しました。

そしてさっさと行進したのです。私は伝令としてどこへ行くときも葉書を携帯していたのです。そうして私はカンブライ *Cambrai* まで行って、カンブライで捕まってしまいました。カンブライまで弾薬運搬列車で行ったところで、一人の男に止められてしまったのです。1916年のことです。そこで私は、その男に「何故か？」と言うと、彼は「そうとも。私に連絡があったのだ。私はこの司令部にいるのだが、私はお前に休暇証明書を発行できるのだ」と言うのです。そして彼は私に休暇証明書を発行してくれました。私が彼と一っしょに司令部に入っていくと、そこには少尉が座っていて、彼が署名してくれ、私たちが出て来るときに、「お前はいい長靴を履いているな。休暇には必要ないだろう。後で他の長靴をもらえよ」と言うのです。そこで私は「なんてこった」と言いましたよ。何かいい物を持っていたら、司令部に連れて行かれるのです。そして私が経験したことは、つまり、私は大きな封筒をもらいましたが、その上には「秘密書類。ブラウンシュヴァイク司令部」と書かれていました。そこで私はその封筒と一緒に汽車に乗ったというわけです。そして、まさにその24時間後に家に到着しました。当時、妻はハンプルク通

り 34 a の妻の両親の家に住んでいました。私たちは 8 月 26 日に結婚するはずだったのです。私たちはヴァッハホルツ通り *Wachholzstraße* にすばらしい住居をもっていたのですが、その間に戦争になってしまったのです。そこで私たちは婚姻予告を棚上げにして、戦時中に結婚式をしなければなりません。そのために私たちは戸籍役場の予約をとったのですが、それは日曜日の朝の 9 時でした。私たちは戸籍役場へ行ったのですが、そこで……「ええー、あなたたちは待たなければなりません」。私の学校時代の友人が彼の花嫁とともにいて、私たちは一緒にそこに座っていました。私たちは同じ日に結婚式をするつもりだったのです。そして私たちは日曜日の夕方 6 時まで座っていたのですが、そうしたらもう終業時間になりました。結婚式は行われず、私たちは月曜日の朝早くにまた行かなければならなかったのです。書類がなかったのです。書類をなくされたのです。私たちの書類です。しかも、私たちは日曜日に 10 回も結婚式の証人として立ち会いました。というのも、ずっと結婚式をする人々が来て、「私たちには（特別な）結婚式の証人は不要です」と言うものだから、そのたびに私たちが証人になったのです。そんなものでした。私たちは、月曜日の朝 9 時に、また戸籍役場に行かなければなりません。そうしたら、またドタバタ騒ぎが始まりました。「忘れていたことがあります。署名です。花嫁はまだ 21 歳になっていません。彼女は 8 月 26 日にやっと 21 歳になります。だから、あなたの舅は、どうしてももう一度、戸籍役場に来なければなりません」と言われました。これは 1914 年のことですが、舅はビール運搬人でしたから、ビール運搬馬車で走り回っていたのです。しかし、私は彼の月曜日の立寄り先の道のりを大体知っていました。彼の立寄り先は、〈今頃はアルテヴィークリング *Altewiekring* の兵舎食堂だろう〉と予想して、そこへ向いました。私は市役所の門番の自転車を借りて、舅を連れてくるために、結婚式用の服を着たまま自転車で出ました。そして彼を兵舎の食堂で見つけ、「お父さん、一緒に市役所へ行かなければならないんだ。署名が必要なんだよ。ヘレーネはまだ 21 歳になっていないからなんだ。」「そうか、じゃあ一緒に行くよ」というわけで、兵舎の門番が舅の馬

の見張りをしなければなりません。そして舅のアウグスト・フィッツナー *August Fitzner* は、皮の前掛けのまま市役所に行ったというわけです。ビール運搬人は皮の前掛けをしていたものです。彼は階段と一緒に上って、署名しなければなりません。それから私たちは我慢強く私たちの結婚式が行われる午後5時まで順番を待ちました。そうしたら、突然、書類が見つかったというわけで、私たちは結婚したのです。

私自身の家庭でお金について妻と話しをする時は、例えば、「これこれだけ稼いだから、お前の手元にはこれだけの金が入るよ」などという風でした。私の小遣いに必要な分についてもです。電力会社にいた時には、例えば、小遣いは必要ではありませんでした。ユーデル社では、私はすでに90ペニヒから、その後には1マルクの時給を稼いでいました。私は、稼いだ金は全て家で妻に渡していました。そして終業後も、まだあちらで仕事を、こちらで仕事をと働いていました。ある処では2マルクも稼ぎました。よそでは1マルクでした。その後は、村々に行って、どんな設備でも作ったものです。家畜小屋の電灯等も取り付けました。夜のアルバイトです。

9. 性・避妊

性の問題について、親に教えられたことはありませんでした。そういうことは、仲間うちでお互いに話していて知ることですよ。男の子や女の子の仲間です。たとえばメータ・シュルツェ *Meta Schulze* ですが、彼女は私とまったく同じ年でした。メータとイルムガルト・シュトラウス *Irmgard Strauß* もです。私たちが12歳の時でした。メータが、私たちに話したのです。それで私は「うおー、それじゃあ……考えられない。」しかし、彼女は3歳下の自分の弟に、「私はいつも司祭の処に行かなきゃあならないの。個人教授よ。あの豚め」と言いました。彼女はカトリックではありませんでした。ませていたのです。私たちは堅信礼の授業を受けていましたが、まだ教会はありませんでした。教会は後に建てられたのです。私たちは市場の建物へ堅信礼の授業

を受けに行ったものです。そこで、私たちがみんな坐っているときに、その司祭はメータの処に行って、「ああ、このボール（：おっぱい）、この二つのボールは素晴らしい」と言うのです。そのことを彼女は弟に話したのです。そうしたら、弟はお上に言いつけたものです。その時メータは12歳でした。どんな風だったかという、司祭が道を歩いてくると、家々の女たちは窓を閉めたものです。つまり、彼女たちはそのことをみな知っていたのです。誰も司祭に目を付けられないようにとね。女の子たちは、当時、何が起きているのか教えてくれましたよ。私たちは子供同士でお互いに教え合っていたのです。両親は、ぜーんぜん、まったく何も教えてはくれませんでした。メータ・シュルツェほどにも教えてはくれませんでした。彼女は本当に、まったく何でもあつけらかんと話したものです。しかし、彼女の母親自身、娘の身の上になにが起きているのかは知っていました。つまり、司祭が何を行ったのかですよ。しかし、大人たちは、そのことについては何も言わず、「彼の処には行ってはいけないよ。」としか言わなかったのです。何も言いませんでした。

<中絶について>

当時、中絶はとても多かったです。隣近所の人が中絶したという話を聞いたことはありますが、本人から直接聞いたことはありません。だから、本当かどうかを確かめることはできません。すでに堅信礼の時（1904年）に、そういう話を聞いていました。アウグステ・ハーベニヒト *Auguste Habenicht* やメータ・シュルツェ、イーダ・クラウネ *Ida Kraune* のような女の子たちは、全部知っていました。彼女たちは何処へ行けば良いのかも知っていました。そして、「あの娘は大きなお腹をしていたわ」などとおしゃべりしていたものです。そういうことも開けっぴろげに話されていました。

私の両親が中絶しようと考えたことがあると、ある時、母がほのめかしたことはあります。

私自身の考えとしては、私たちは、最初から、私の学校仲間と「子供をも

つかどうかは、人それぞれの考えだから、他の者には関係ないのさ。しかし、上の階級というか、上の層の人々が子供を生まないのは、何かおかしい」といつも話していました。私たちは学校の生徒なのに、こんな風に話していたのです。そして、何人かを名指して挙げていました。例えば、ある 16 歳の、大きな工場主の娘のことです。彼女は通りで男に声をかけて、家に呼び込みました。16 歳の娘がどうやって家を 1 軒買えるのだろうかということを説明できる人はいませんでした。まずそのためには裁判所で登記しなければなりません。その娘のことは後に有名になったのですが、その家は「赤い絨毯」というのです。その家はカイザー・ウィルヘルム通り *Kaiser-Wilhelm-Straße* にありました。その女の子はシュマルバッハ *Schmalbach* という名前の、ある工場主の娘でした。娘が女の友だちと一緒に、その住居で男達と裸になって乗馬の稽古をしたというので、両親は改宗しました。彼女は 16 歳でした。このことは、ブラウンシュヴァイクで有名になって、皆が知るところとなりました。しかし、彼女のカイザー・ウィルヘルム通りの家で、警察は何も見つけることができなかったそうです。

〈避妊について〉

私が婚約していた時代は、みんなが 3 人や 4 人の子供を持っていました。しかし、それでは生活が大変きつかったから、本当はそんなに子供を作りたいはなかったのです。もちろん、子供をあまり生まなくなった原因は生活苦です。私たちは子供を 2 人しか作りませんでした。だから、集会の時などに、私はいつも発言しました。「君たちはいつも 10 年、20 年後に何をするかを考えているけど、我々は今、生きているのだ。だから、子持ちの人々は妥当な家賃の住居を得ることがとても大事なのだ」とね。そうなのです。当時も大変な住宅難でした。だから、子供も作りたがりませんでした。どうやって、避妊したかということ、簡単です。父がまず注射器のついた器具を買ったのです。つまり、母には看護助手の姉がひとりいました。この叔母が両親を啓蒙して、この避妊器具を使うことを教えたのです。そうしたら、そのうちに、

あつという間に薬局やあるいはドラッグストアでこの注射器を買うことができるようになりました。この器具は、ボールの形をしたものに2本の管がついていました。一方の側に弁がついていて、もう一方に散水口がついていました。この散水口は、その後売られなくなりました。つまり、その器具は一種の洗浄器だったのです。両親は、私にこの器具のことを話してくれました。

母が、「私のお姉さんは病院で働いているから、何でも知っているのよ。彼女はそういうことも何でも勉強しているの。こうこうこうやって使うの。まったく簡単なよ」という具合でした。私の両親の家では、だいたい何でも語られていました。しかも、誰かが両親に「どうやってそれを使うのだい？」などと尋ねると、「どこそこの誰々の所へ行きなさい。そうしたら、教えてくれるから。でも、それを口外してはいけないよ。でなければ、刑務所行きだからね」と答えるのです。つまり、それは禁止されていたのです。そうして、すぐに実物を出してきて見せるのですよ。「そうよ、こういう注射を買うことはできるのだけれど、この前の方の散水口はついていないの」と説明します。すると、エルゼ・ファスターリンク *Else Fasting* が — 母の一番上の姉ですが — 「私もドラッグストアへ行ったわ」と言いました。彼女は、ある陸軍の一等軍曹と婚約していたのですが、ドラッグストアで洗浄器は買えなかったのです。それはもう販売禁止になっていたのです。注射器は買えたのですが、〈空気圧によって生命が危険にさらされることがあるので、注意深く使用すること〉と赤い枠の中に書かれた使用説明書付きでした。注意深く、正しく使わなければ、使わなければ……。もちろん、当時、それにもかかわらず、使用されました。私たちは、そんなことは知っていました。ローズ通りの時から、そのことについては全くよく知っていました。それはよく使われていました。私たちは、13歳か14歳でしたが、性の事については、誰かがこの事について知っていて、またちがう誰かがあの事について知っていると、くだらない事もいろいろ教えられたりしました。しかし、その中には、母親に「よくお聞き、お前、遊びに出かけるときは、もう一つのズボン（：コン

ドーム)をおはき」と言われた仲間も何人かいました。昔は、あけっぴろげな連中はみな、このズボンを持っていたのです。先の尖ったやつでね。「もうひとつのズボンをおはき！ 関係を持つ時は、すぐにやっちゃあいけないよ。」と母親に言われたのです。私が13歳か14歳の頃のことです。早熟ですが、そうだったのです。私はいつも田舎の村へ行きました。田舎の子供は馬鹿だと言われていましたが、村の子供は、人が思っていたよりはずっと利口でした。というのも、彼らはなんでも見て知っていたからです。彼らは雌牛を連れて雄牛の処へ行きました。雌馬を雄馬の所へ連れて行ったりもします……私はよく村へ行きました。私はもちろん、たくさん学ぶこともできたのです。もちろん、私もたくさん質問したのです。

私は1914年に結婚しました。私の住んでいた家の他の住人が、あれほどにおかしくなければ、私たちは息子を生まなかつたでしょう。他の住人たちがいつも「まったく、お前の二人の娘たち、お前はばかだよ」と言ったのです。だから、もう一人、男の子を生まなければならなかつたのですよ。そこで私は、「まあ、じゃあもう一人、男の子を生むさ」と言ったのです。当時、私たちは洗浄器を使っていました。その他には何も使いませんでした。この洗浄器だけです。これは当時許可されていませんでしたが、禁止もされていませんでした。他には何も使いませんでした。洗浄器は、正しく使えば、完全に安全でした。しかし、最初の娘のイルムガルト *Irmgard* は偶然できました。本当は、まだ生む予定はなかつたのですが、妻が妊娠してしまったので、じゃあ住居を探そうよということになって、それから結婚したのです。妻が「知ってる？ まもなく生まれてくるわ。私の計算では……」と言いました。私たちはどっちみち、結婚するつもりでした。

10. 帰属意識・宗教・政党・労働組合

<帰属意識>

1930年以前の状況について遡って考えてみると、当時、私たちは労働者居

住区に住んでいたわけですから、私は労働者の階級に属していました。

子供の頃、最初に労働者の子供だと意識したのは、私が上の学校に行きたいと思った時です。私はとても良い成績で、本当にとても良い成績だったのです。だから、上の学校へ行くべきだと考えました。それで試験を受けたのですが、試験に落ちなければならなかったのです。それは最初から決まっていたことだと試験の時の質問ですぐに気が付きました。面接が始まって名前を呼ばれた時に、「エーリッヒ・L、君の父親の職業は？」「機械工」「そうなのか？ 君の父親の職業は？」「機械工のマイスター」「何だって……店を持っていないのか？」「いいえ、僕の父はグリーンメ・ナターリス社で働いています。」それで私はすぐに気がついたのですよ。つまり、落ちるだろうということです。「あいつは落とす」と言ってね。その後、私の親戚の場合は、もちろん違う方法でやりました。彼は、大臣を使ったのです。彼はハノーファー *Hannover* まで試験に行きました。そして、学校に入ることができたのです。彼はもちろん退職して20年になりますが、デュッセルドルフ *Düsseldorf* の高等地方裁判所参事官でした。

<労働組合>

私が労働組合に入ったのは、当時の賃金が非常に低かったので、ある程度生活できるほどの賃金をもらうためでした。当時は少年を雇ってはいけなかったことになっていたのですが、私が15歳の時に、少年も働いて良いことになりました。そして私は当時の職場委員、フォルペル *Volpel* という名前でしたが、彼にすぐに採用してもらえたのです。彼が私を労働組合に勧誘しました。

子供の頃に、メーデーのデモに行ったことはありますが、父は一緒には行きませんでした。それは、私が14歳の時のことで、初めてメーデーの行進に参加したのです。騎馬巡査隊が私たちの後ろからついてきて、私たちをレオンハルト広場 *Leonhardplatz* へと追い散らしました。そして捕まえることができた者を馬の後ろにつなぎ、引っ張って行きました。

私は、金属労働者連盟 *Metallarbeiterverband* からメーデーに参加したので

すが、ある時、大変な殴り合いが起こったのです。それで、「もう二度と行かないよ」と言って、もう行きませんでした。メーデーには家族と一緒に行ったことはありません。

〈社会民主党について〉

1928年に入党しましたが、それは当時の一般的な傾向でした。つまり、我々は入党して、我々は議会に行き、我々は主張すべきだなどと思ったからです。それに当時、SPD（ドイツ社会民主党）ができたのです。それによって我々は議会や政府で主張することができたのです。もちろん、会社の労働組合の仲間から影響を受けました。入党しなければなりません。党には入っていませんとも。党は必要なのだと私たちは今日に至っても言っていますよ。党は必要なのだけれども、しかし今のような党のあり方は、残念ながら間違っています。本当に残念なことですが、今のような党は。

労働組合をとるか、消費組合をとるか、何をとるかは、どこだって同じなのです。もちろん、党員が悪いのです。党の集会があると、誰も来ていなかったりしてね。20年代もそうだったのです。消費組合でもそうでした。当時、消費組合が設立されて、両親は入会していました。最初の店は、ゲルデリンガー通り *Gördelingerstraße* に出されました。私たちは、ホップフェンガルテンからその店まで籐の乳母車で行きました。大きな木の車輪のついたもので、その乳母車の中に籠を2つ入れてありました。5マルクでその2つの籠がいっぱいになりました。その店で安い買い物をしたのです。消費組合は燃料、つまり家庭用燃料も売っていたのです。例えば、1ツェントナー（：50 kg）のブリケットが45ペニヒで、その上、7%の利益配当がありましたから、石炭屋で買うよりも安かったのです。だから、とても多くの労働者が消費組合で買い物をしました。当時、私の両親の会員番号は1040番でした。当時、すでにそれほど多くの会員がいたのです。そして、いつもゲルデリンガー通りへ買い物に行きました。

私の妻はSPDの党員でした。彼女は26年か27年に入党しました。26年か

27年です。彼女は彼女の兄の影響で入党しました。私よりも早くに入党していました。1933年以前に脱退もしていません。彼女は主婦だったので、労働組合には入っていませんでした。

〈役職〉

私は電力会社 *E-Werk* では経営協議会の役員でした。まず労働者代表として選ばれ、7年間経営協議会の役員を務めました。そして1927年に役員を辞めました。私が職員になったからです。

11. 祝い事・余暇

私の両親は子供が多かったので、子供を食べさせていだけで手いっぱいでした。私たちはよく外に行って、なんでもあるだけの薬草を集めました。薬草を集めたり、木の実類を集めたり、野いちごを採ったり、ブラックベリーを採ったりしました。パパは、そういうことを全部知っていました。遠足に行った時に、そういうものを採ったのです。遠足といっても歩いて行ける所ばかりでした。エルム *Elm* やマッシュェローダー・ホルツ *Mascheroder Holz* や、ラウトハイマー・ブッシュ *Rautheimer Busch*, そしてティンマーラーアー・ブッシュ *Timmerlaher Busch* などへ行きました。レツヒルマー・ホルツ *Lechlumer Holz* にも行きましたが、いつも歩いて行きました。私たちは朝の4時半にエルムへ向けて行進していったのです。そしてお昼の2時には、もうまた家に戻っていました。ペパーミントなどの薬草だとか、採れるものは何でも採ってきました。西洋ノコギリ草だとか何かでしたが、ママが縫った袋に全部入れてきて、屋根裏部屋で干したのです。週末の仕事でした。どんな天気でも、私たちは外に出かけました。冬も外に出かけました。ヌスベルク *Nußberg* に行きました。当時、すでに櫓の滑走路コースがあったのですよ。私たちは、4人か5人で、当時は今みたいに交通が激しくなかったので、ヌスベルクを下へと滑り降りました。冬は、そんな風でした。その他にも、

当時、私たちはいつも冬の間4週間、オカー川 *Okar* でスケートができたのです。これは話しておかなければなりません。4週間もですよ。ここのシュタイントア *Steintor* からオカー川に行ったのですが、1ペニヒ払わなければなりませんでした。煉瓦工がいたのです。彼らは仕事ができないので、そこにベンチを置いて、スケートを貸していたのです。それで1ペニヒ払ったのです。気前のいいやつは2ペニヒ払いました。お金を払うと、花を1本差しってもらうのですが、それで滑ることができるというわけです。両親は一緒に滑ったことはありません。私たちのパパは、一緒に行って、そこで私たちが遊べるようにしてくれたのです。私たちは葉草などを集めてきましたが、それは大して家計の足しになっていたわけではありません。

当時、まだ祝い事などはありませんでした。後に、大晦日は盛大に祝いましたが、私の両親の家ではそんな祝い事もしませんでした。カーニバルが何かということは知っていましたが、祝うことはしませんでした。大晦日には、外には出て行かず、家で祝いました。仮面を買ったものですが、これが1個、6ペニヒか8ペニヒでした。マスクをかぶりましたが、これは袋を利用して、自分で縫って、作ったりもしました。そして、植物の靱皮繊維でお下げ髪を作って、仮面に付けて、大晦日の準備が終わります。それ以外の祝い事はしませんでした。カーニバルはカトリックの地域のものですから。ライン地方のカーニバルの祝い事については聞いたことがありました。当時は、まだラジオのような物もありませんでした。

何か喜ばしいことがあると、父は「お母ちゃん、葉巻を一本、買ってきてくれるかね？」と言うのです。母がいつも家の経済を握っていたので、母が彼のために葉巻を買ってくると、それを貰って「ああ、お母ちゃん、でもたくさん金を使ったね」と言うのです。「ああ、後からまた吸うよ」と言って、2度くらい吸うと、葉巻を置いたものです。

後に、私が家庭をもって、子供を持っても、家でカーニバルの祝い事はしたことはありません。しかし、大晦日は祝いました。学校では、女の先生がひとりか二人、そのような祝い事をしましたが、家ではありませんでした。

私が妻と一緒にってから、誕生日などは祝いました。家の庭で祝いました。

私自身の家庭では、クリスマスは祝いました。クリスマスツリーはなくてはなりません。プレゼントはいつもありました。当時、私は女の子には人形の家だとか、いろいろ、すべて自分で作ってやりました。家具も作り、人形用の家の中に入れてやりました。本当にすべて作ったのです。男の子が4歳になったときに、鉄道の汽車の模型を買いました。電気で動く汽車の模型です。当時、ピンク *Bink* というメーカー名でしたが、今のトリックス *Trix* です。そんなに大きいものではなくて、小さなものでした。ピンクは、当時はまだとても大きなメーカーでした。私たちは食堂のテーブルの回りに坐りました。机は甲板伸張式テーブルでした。甲板を伸ばして机を大きくし、線路をテーブルの上に置きます。それからコーヒークップを貨物車の上に置いて、出発します。そうして、コーヒを欲しい人の処まで走って行って、止まるのです。その前に、私たちは一週間も床の上に座ってトンネルなどを造りました。石膏や針金でつくったものです。

それがクリスマスの準備でした。手は真っ白になりました。当時は、石膏や針金の上に紙を貼りました。まず膠を煮なければなりません。というのも、アラビア・ゴムという物があって、いわば液状の膠なのですが、これは高すぎて買うことはできませんでした。そこで膠を買って、それをかき混ぜながら煮たのです。これを塗って紙を貼りました。

クリスマスは、いつも祝いましたし、復活祭には、イースターの卵がありました。私たちはたくさんの卵を集めました。よその家にも行って、卵をせがんだものです。タマネギの皮を丸めてボール状にして、鍋にいれて、卵をゆでると卵の殻が染まるのです。ラッカーの絵も卵の殻に描きました。母の日は、当時は知りませんでしたし、当時は、そういった祝い事のための時間がありませんでした。やっと、ファルケン *Falken* で活動するようになった最後の数年間ですが、夏至と冬至を祝ったくらいです。子供の頃のことではなくて、私がファルケンで活動するようになってからのことです。

冬至と夏至の火祭りは、本当に盛大に祝ったものです。1年に2度祝いました。1度目は夏至の日で、2度目は9月の冬至の日でしたが、9月の冬至の火祭りは盛大でした。まず、何週間も前に準備に取りかかるのですが、木を運び込みます。大樽や不要になった板などもです。そしてそれらを積み重ねていきます。それから火祭りのために大がかりに火を燃やすのです。唄を歌い、講演もありました。唄はほとんどが社会主義の労働者の唄で、我々は赤い鷹、みんなで通りを行進していくときは、青い衣を着て……という唄です。古い民謡ではなくて、本当に社会主義の闘争の唄です。そういった唄をたくさん歌いました。とても多くの人 came。私は出店用に60センチの幅の調理台を持っていました。私たちはいつも出店のために、ヴェスターマン通り *Westermann-Allee* の石炭商のボルデ *Borde* から牽引車を借りていました。夏至と冬至の火祭りは、いろいろな場所で催されて、エルムで火祭りがある時は、祭りの1日前にもうすべてが準備されました。そのほかでは、ここのブッフホルスト *Buchhorst* でも行われましたが、いつも火事の危険がありました。ブッフホルストでは、よく注意して、火事にならないように気をつけなければなりません。だから、風が吹いたら、私たちはいつも積み重ねた薪の半分を崩しました。

ファルケンでは、私はいろいろな役を引き受けていました。器械係だったり、ファルケンのためにテント車を作ったりしましたが、すべて私の費用で作りました。テントの支え棒は、鉄パイプで作りました。ほかには太い梁しかありませんでした。鉄パイプの中に別のパイプが入るような仕掛けにしました。私は、当時、そういうテント車を作ったのです。ファルケンと一緒にあちこちの土地へ遠征に行ったことはありませんでした。その時間がなかったのです。私はいつもファルケンの遠征用テントのための買い物とかテント用の場所の手配をしたりしたのですが、一緒に行ったことはありません。1920年代のことでした。

その後、娘のエリカが生まれましたが、私はテント付きの車を作り、それを自転車の後ろに付けて娘たち二人を乗せて走ったものです。そして、ある

日のこと、シュタインヴェーク *Steinweg* で誰かが「その車を撮影してもよいですか？」と聞くので、「いいですとも」と言いました。私を撮影して4週間後にベルリンの特許局から、以後、この車を作ってはいけないという手紙が来ました。

大人になり、結婚してからは、ヌスベルクの家には庭がありました。1919年のことです。土地が分け与えられたのです。なぜなら、60 モルゲン（1モルゲンは約30アール）の土地を持っていた男がいたのですが、彼はその土地を荒れさせてしまったので、役人に取り上げられたというわけです。それで裁判所の執行人が、ちょうど1919年11月2日に、くじ引きをしたのです。その土地は区画に分けられて、その区画にそれぞれ番号を付けたくじを作って、それを帽子の中に入れました。そこで、私たちはくじを引いたのです。おもしろいことに、私たちの家の住人が4人もくじに当たったのですよ。それで、私はいつも庭仕事をしていました。

その他、余暇は、私も妻も演劇協会に入って活動していました。『エルヴィラ』という名前の演劇協会でした。妻は15歳の時に入ってから、ずっとそのまま入っていました。私がいつこの協会に入ったのかは、第一次世界大戦前ですが、もうよく覚えていません。妻も第一次世界大戦前に入っています。私も演劇協会から脱退せずに、ずっと入っていました。その他には、妻はどこの団体にも入っていませんでした。